863
157

以登久留満

伎系　松後撰

ガラス使用

863-157

糸車

序

俳諧者ことく君子ハ縦のこゝろしるへきにや
いかとの節しきくれむともかは里正して先師云来
庵也やふ実ならて深ハ森々庵の主人なりしか
嵐にそれ梅花の鼓をんとて去年その夜ハ路の
双林寺に七日ほとの法会を取越しとく〳〵の操也
正当なるも又庵の太雪ふるに塚供まるハ為覚えむ

素々庵松後撰

ガラス使用

く去年といひことし迄いひつゞけら
手向の禄もこゝろたかなるしのちゑんる
さしくも表すの至のこゝろさしを絶さらむ
るをおもひはかりてこの集乃名をはなん
とるしは糸くる滿ともいふましや

天明六年孟秋　公化房雲り

国立国会図書館蔵

歌仙行

我かつくし先師の教を受侍りて
三十余年ふきて此比小昌場の
折く八日夜俳侍して以さる
薪香の労ひなせし懐旧乃情を
墓前に告んこと志なり

まちて汲むもろかなし五器ならつ川　松後
安居の話も雲収り乳山　公化
中よへと象るもいは際る帰して　想三
有りしん代よ来る云ありあり　桃児

ガラス使用

湯ありける梯子はいところ〳〵せ　窓雨
来これ来れあい峰より　有卜
宿は名を隠も所はてふ破の月　桃不
入院の和尚芋をおしまれ　我計
勝金の蔓ぞ見せよ為末棉時　有篁
袂もぬらしへぬ川の手あそ　二竜
若葉を十年種でも持らされ　氏参
恋の波立と大下さ安にこそ　芳吹
打子も川ひたりも雨に独なれて　梅十
見おほ入のある桃花乃紋　十明
大名も隠倉中にあまるほせ　氏君
我かゝれしこそ一瓢の飲　葛庭
木かゝれの玉も荒らそよ嵐にも　虹光
利生をかりに神のつらてう　一飛
菓しよ里産むか安みて又ものし　化
おこゝ語うけぬまでの定宿　後

松か根を洗ふてそゆく浪の音　児
この月もはや十五日に成　三
わかまゝな君に内証あかしける　計
俄になきとき膝のかけ月　西
猪は猟しひに近く鼻ふいて　卜
笹にあらきれはしくしく　孤
蕙好ハ志かれにきれそのしまを　竜
夜市につまゝ銭の塲おし　玄

松茸も月も車めまはされや　吹
御幸ぞ成て雲もはるらん　十
萩荻のもやうを合せて縫手際　朋
きおされ見よ男ぞしんそ　君
葬礼も佗に果敷はあらハれて　篁
世筆とて捨らせぬ世の中　光
おかしきも花さびしきも花の道　庭
免ふみそいつき藤に籾種　呑舟

ガラス使用

余興

短歌行

西にまでもゆかし紅葉の東山　虹光

鶯よいは老をかさん　松後

分別といふものに思はかられて　公化

行かん方へ水の流れし　此君

晴はしし星れ七日に八日月　香舟

引手あまたに傾城の秋　有篁

むつとする事も笑ひにくるめ置き　弌玄

御用の扱うち上より　二竜

大津かし小判よりハ米一俵　桃江

夜深き旅に従をとりき連　恕三

さえかへる空もいつしか花もよし　猗十

社日をかねて味噌搗によし　桃児

若者水と舞の家叙な特にも　窓雨

抱るハとちんおあるくの子も　一花

ガラス使用

紋にあかき中にも鶴の色　我計

離れせぬ花にさゝえを添　葛屋

千鳥なく月夜に声やさしさえて　十朋

梅津かつゝも萩はしきなり　芳吹

春雨の弥八傘のさゝぬ横しぶき　有卜

面ハ豆ふしか根をこさん　光

猫は下かゝこ語り琴の爪　後

峯へ風すりも松ハ音いり　化

春は日もまさゝ入りてふ花の雲　皇

申さる国をいまし蓬萊　毎

探題

鳥の音に流いて捜れや梅か花　京 葛居

踏まへ所升の落葉の道なをし　桃江

綿ぬきは翁まねらし旅の空　桃児

青鷺のかてあしやかきるもて　有卜

入佛の寺も廿日は牡丹かな　我計

所の花に翁葉は聲をおもひけり　窓西

山寺は夕飯ごろやほとゝぎす　恕三

世にすねて春ハ咲くれよ藪椿　（伏見）芳吹

まゝ音もまゝ音にしてかんこ鳥　（豊後日田）有篁

峯はあらし手もとに麓はあつさ哉　二竜

酒くみな庵子花柚のさかりかな　此雲

寺をやりて庵は飾りかな　弌君

葉櫻にありてハ遠し宮の山　（浪花）香舟

戸さゝぬ代知りて夜毎に鵜かな　皂化坊

莨かりも薪や苔の花　（備前）梅十

樒は次のうし潮ハかゝき毎かな　十明

舟の子や鯛ハまさるなかに水里　一兆

留守なからいふ庵や芥子の花　（女）柳枝

ガラス使用

川までハ追ふても見ゆる飛ふ螢　女　佳紅

老を忘れて初茸とらむは原芝か　松後

天明五年乙巳四月六日

花洛於双林寺興行

連衆

二十一人

墳墓造立序

去し比毎月ハ先師の忌日にあつまりぬれハ
門葉の人〻深く石を爲ひ出さことく義の
大雲寺に先師の墳墓を築く此比ハもとより
座師の一葉塚さへありて月雪花の吟席もさらん
さは更なれハ翁を多く来り諸て師徒を仰き
志をつくしあり猶しもかりれ佐者の中に先ハ
上人の一句を記し名を経釋の要文を勒し

ガラス使用

してあるハ香花あるハ茶菓に題して名誉の為に
擬ふよし云の類ハ得しかたくそもある倡作比ん
さしひ文字唐ハさしんや古きハ生前北師の肖北
ちきり北下にも有此榜をましくハ霊魂永く
此塚に止りましして我業の風雅をとらぬをなハし
まねへや

古の塚やいく秋も
露れ至る之語

森々庵
松後

踊躍皆歓喜

月夜よし立よし踊の音頭よし　孤松

生死涅槃猶如昨夢

盗まれてきよく瓢の垣すゝし　梅十

是心是佛

秋涼し烏森の味よ味噌の味　松宇

直指西方

蓮原やいよ浄土あり花枕庵　途川

ガラス使用

一心不乱

雨に風に構ぬ案山子の弓矢かな　挙白

一念十念

三日比月宵寐ても夜のたし免かな　孤蘭

捨此穢身

樟や啼しまふに蝉の脱　朝伍

頓證菩提

世の盛も梢にぬれて熟柿かな　巴卜

極中之極

吉川秋も目にさやかな皆一葉かな　二三

去此不遠

名月や又六が門ハ先しかてらも　子我

如弾指頃往彼國

貴なる人をい川か遣まん放し鳥　起六

皆悉到彼國

子ゟ限千あ川て古郷へ燕かな　友江

ガラス使用

香

常香ハまた更ぬのにまりくた　尼 智泉

茶

秋風や夏切れ茶も初むかし　女 梅伍

菓

色見えぬ思ひをとちに西瓜哉　桃李

飯

うづら啼く星の影さすや粟の飯　佳紅

餅

おもはし秋や小まに萩の花　巴香

酒

新汲んで酒もまむあり身の前　葉陵

各供花

萩垣の露にねむるや御傘持　李川

螢比去む新よりうし荻の風　十朋

ガラス使用

はしに秋の日もよけれ木槿哉　廬香
山の井を鏡にするや花すゝき　稚桑
庭むら川秋海棠乃咲にけり　芦川
色つよふハ咲ちめ葉乃秘蔵か那　其友
あさかほや青の簾ねの下張れし　有梅
る士北ねあれけりや女郎花　如梅
大名の駕へ免されし堂菓哉　訒流
と猿かさふ佛孫ふらし綿延哉　峨危

長歌行

洪鐘雖響必
待扣而正鳴

とほり海を塊やむよの信より　僧　芦舟
七尺さつし塚手し有明　松後
秋ふく旅去川弱比歌かん　交江
葛しめつゝふ目おしくほあり　松守

執筆ハ花の山にも袖をかり居て　逸川

いくふもりくさよ寺川音　孤蘭

茂りあふ中に小櫻のむさくり　巴卜

こゝしきちやよ敷居濡りけり　二三

子をかくも四十過くれ拾ひもの　子嶽

出頭気さ報昔よきい人　芦川

竹場町南へ風も吹かくれ　應鶯

堂こふも谷を住吉とこゝ地　有梅

あさ菱に見えくも後皆の堂のほれ　雅集

ねさく此梯のまききんよし　其友

浅湯の淨さん流む日と濁る日と　釈流

後孫きくも柳しちかり　自樸

いさよひと戸をかり此宿を求て　起六

鈎の鰭をとくハ庖丁　式由

伯ムハぬ敲て花の頃のふよろうと　挙白

清亂きかく孫膝をかり物　魯調

いかし居に子細を持ぬ九寸五分　十朋

枕明けて八十弐文て　佳兵

菅をほし曙えやし花の山　孤松

空よも知くふも雲雀さえ游る　井之

街道のお陰に東を迎やまし　後素

為いこゝ語て唇にゆく歯　佳凡

降ふらてもやくな事を屑走　先姿

雲北免の渋以きえふりり　楚毎

鯨はく浦辺小窓に入来りく　芳児

六部に宿を借りくよ　欣吾

吉原て出あふよ数小立かりと　文国

起れ子時に香ハ春風　竹之

卯の花小まれ楊よ肥るまれ　蘭水

本んを一軒閉るの家　和風

血こし縁も茶いしまの挿ひ味噌　如枝

活とめて辭のまゝ斎藤好　自緣

も旅人を川こせけり伊勢の神　其朝

ちとふ作法を下路乃番椒　春井

月もちや行ら水咲て青の菊　峨危

律は志ら庵の琴柱をちゐる　錦波

くゐまふ紙角に胸の辺や体心て　梅千

あかぬわかれも命あれきを　宗流

世の中は淵も瀬となり瀬ハ島　以平

をい川こえぬ井筒屋の金　一斗

紋はきし梅摩か拵織えつゝしく　古硯

翁の名もりれ墨りてハなし　亀玉

年経ても花の鏡れあきしらふ　李川

ねるむ流水の末来の我〱　朝伍

近き國の同志れ人〱
その外の作まとて句を
おくら原

ガラス使用

播州

山里は後の月見やさむし来　（赤穂）青牛

杖をはく手ハまだ寒し梅の花　篠仙

賤の女か氷柱以てく桶寒し　素琴

永き日に雨宿す窓の柳かな　布川

窓に入る秋の夕日や鴫の声　素文

煤掃や猫ハ隠居でするまハれ　此君

讃岐

菜の花酒にあらしく茶に淋し　素丈

きし至る湖ら此篝や郭公　瓜洋

三日月は談よまとゝり虫の声　女　ちう

短くも見ゆも見えやまし更衣　玄舟

花さへも淋しき梅を種ふく庵　蘆風

名月や変るのも竹のむむし頃　右文

こゝ川家き砧をかりき隣かな　右柳

幕掛なるて捨しやちり柳葉　李峯

いつの代よ住むや墳の三日月　今津　菱波

ちりはゝ住んで淋しき巨燵かな　三井　仙詔

いけ花は替よと赤くや今鳥の秋　金倉　鷺白

さもしかゝ姉八踊らぬ仲居哉　葛原　時由

音はこハ庭もぬらさぬしくれ哉　山階　也柳

あり餘る風情やいちん萩の露　履香

花てあれをと巴八れて桔梗のちれ　広　松話

紫黄を麻きく宿のあるし哉　多文庫　一泉

笠の端へちらり吹こむ山桜かな　中津　得奥

草むらく昼眠ち時はあはれなり　上村　嵐江

灌佛や郭公学ありしかな　流園　嵐光

青梅やよし川音ゆもきのかな　佛生山　洸花

嫁ことは子八奈てもら花見哉　氷上　祐之

渋柿や知ても性きかはれかな　南嶽

庵濡れ松八と同入ハしくれ哉　麻　其桂

舩の月波小入るまて詠めかな　西柳

ガラス使用

初雁にあはむいづれハ三日の月　益可

露ちりて起る雁やあらし　旭水

伊豫

ぬく汁や此ころ夜を獲けり　（川之江）巴令

埋火ひまゝやちゝの小床見ゆ　巴江

つまらぬハへてけりやちり柳　濤嬰

咲さより蓍を床しき菊の酒　尚山

あきよ風を吹ても芥子の盛り哉　紫渓

咲ほど浅かりぬるやかきつばた　吾唐

阿波

鶯の餅にもかゝる若葉哉　（柿系）機因

雪解し障子にうつる柳かな　（徒修）梨友

お乳の人も手にあまるほどや芽花哉　北馬

鳥も木に声やもえてや春の雨　為嘗

約舟の芦ろ入隙るしられけり　太魯

酒もなほ花も送る此景致かな　不求

ガラス使用

柳さへ涼しきものを庭清水　李吉

海になかめて八里迄も汐干哉　渭可

やさしさハ名をかりてなし女郎花　女　民

夕風にうちも扇から雲乃峯　宇桂

遠山は霞むあまりの朧月　成瀬　衣富

はこされやまむ甲斐ありて京の水　拎　凡蕉

漁火の糸屋ハむかふし荻蘆　矢武　連山

海棠ハ弥むりなからに霧の月　吹旅

涼まらゝ菖蒲ふくなり菴の軒　岸寛

蝶〱や何それかり藤も花の宿　三可

尼寺や沛不深もむし川去年　浪華　洞逑

孝行に呉孟を負ひまゝ数まりかな　大坂　浚笑

折まして涼しかりてや合歓乃花　蒲池　壺仙

引追も女子なりけり大根引　逸秋

青雨やなゝて何日末苔の旅　引田　如帆

片町へ海から通ふ流ものゝ部　井尾　蘭室

ガラス使用

やりとあれ梅の匂ひや野の廣さ　鶯亭

葉は柳と見へぬ桜のはなし哉　久千田 里杏

鳥羽道や雉の声此右ひより　李山

春雨や麦よも海られ揺みも　桃西

見よ〳〵も曇けり事し乃花　吐雲

土佐

秋涼し萩ちりはしつよ窓の風　通洛

ゑる此ゆられながら小眠りけり　章風

ぬくき風の手伝ふ鳴子かな　芦風

夕立にきむ声て好や帆かけ舟　杜李

鶏頭やはふむ笑くの世話もなし　古然

鶴のあしいよ〳〵高き林野かな　風山

浪花

そよ吹く月にあふむく東山子が　香舟

夜の雪橋へかゝれハ傘おもし　末白

川向ひきぬしなあのれ砧かな　文陵

ガラス使用

備前

名月や波うき川とおきてけり　松亭

手桶や汲むとハなしに鮎ある川　二三

腰かけを忘れて煙の寒さ哉　芦舟

ゐるにおかすまた川原の紋菊哉　李川

幕月も崩さて通ふしくれかな　梅十

まハり居て菜の花をみる安さ哉　近川

雪おれぬ鳥も鳴あり山ほとゝきす　孤栄

誘ひあはぬ友もふえけり櫨将　十朋

きし鴻にも宮こら川ふしき火焼哉　尼 柳糸

何不足なりと涼しい御見場居哉　同 智泉

川舟に一日見るや花の山　女 梅吉

こら川ふら川目に泣いてかやはくし、　桃李

清も水とも思ぬ雨を花の雲、　菓後

衣々へや人にはしおしく惜しくし、　巴香

庭の木に背比べして蝉の声　少女 菓枝

ちりかゝる所ろ葉にしみ入て時雨かな　佳紅

犬の子のぬれてかはゆし五月雨　少年 松秀

菜の花挾かりを見てくみや芦かな　仝 寸松

瀬かしらの小舟見へゆく日和かな　孤松

納豆に三千坊のこゝろかな　鶴伍

七夕や少声て伴の乏く織屋町　子我

老の目にあ継く雪のあかりかな　巴卜

豆殻ハまく明よ咲かてあハれけり　水之

菜打て大工住けり宵節句　律心菴 夜江

家ちかくゐる鶴啼あり田かえさ　峨卮

出川てこ地それとも行き逢花に蝶　芦川

番小屋の灯も消えてのちかゝる鶴哉　稚集

山里や豆腐の荘へちり松葉　貞柯

梅ろ魚やいつれ康ん起こゝ語　自樸

うくひすの声ぬるに起て帯哉　其友

山吹に養子は迦壹のわき根哉　此由

ガラス使用

鶯は梢つたひや芦法追け　紀流

しこく加せ見れハ動くや蝸牛　庵鶯

行春と共も小名残りや旅芝居　（桂菴連中）記六

落栗やむさ川ハ流れ小拾ふとも　後素

柱毎も雪積むて年忘れけり　佳風

渡り初し木樵や君乃舊橋　先姿

るゝられる小峯靡く雲の蓋　楚舟

涼しさや一間ちらちらちらつく笹　芳兒

川岸やいつもの石に夕すゞみ　依吾

文を見ぬんも淋しき冬籠　文國

花の咲木ハいち早き落葉かな　竹丈

打ふしも杉もやらしと氷かな　峯白

味わくに拾ふ木せて落り棟　和風

片山も流ししに淋し夕日かな　自儲

冬も又隣は花小酔ふけり　錦波

秋に今宵絲の囲たよふせ結もしき　春井

ガラス使用

錆鈴ひのいく渡にやも祢狗飛　真朝

入おもふに吹来る落葉ゝ哉　菜水

窓によれは浪とこ乾きれ月と梅　京流

流しいしおる童に同ん初さくら　汲平

朱雀里や橋葉のうきれ廻り道　星嬰

南瓜に里ふ志のくや竹の庵　直習

舩て出しく舟を添やうみの月　好柳

初雪やさと夜ハ泊浪笹の上　芦水

ゑ仙をまゝ葉きりやふさの中き　錦車

稲叢をうちかた枚の山遥かな　可然

芦原やうたくを見れハ雪の鷺　井之

山寺やしられおりし雪の中　古硯

家去庵や袖千まうえ紅葉　一斗

笠の端千四五丁からみえにけり　亀玉

庇うつ萑おくりや雪の高　佳與

月まこ飢もて流しても木下暑　魯調

洋印
863
157

14257

出てさんも菅かぬ日を雲雀哉　如梅

萩さくや松にも花を春日山　庁上 留止

名月や木陰もりを夜る程ミる　文香

流り竹に毛ふ見れよきさの秋　白化坊

かんこ鳥啼や卯月此山櫻　松後

丙午七月廿六日
於大雲寺興行

連衆
六十七人

浪花香舟書
洛掛治梓行